



空襲・地震を生き抜いたクスノキの老樹

福井大学工業会 福の井会 記念講演 (2023年7月8日)

# 工学部100年の礎を考える

福井高等工業学校・福井工業専門学校から福井大学工学部へ

福井工業大学教授 市川 秀和

(建築学専攻 H5 修了・システム設計工学専攻 H8 修了)

旧制・官立高等工業学校から新制・国立大学工学部等へ

	創立年	校名	新制大学	キャンパス
明治期	1901	東京	東京工業大学	移転
		大阪	大阪大学工学部	移転
	1905	名古屋	名古屋工業大学	○
	1906	熊本	熊本大学工学部	○
		仙台	東北大学工学部	○
	1910	米沢	山形大学工学部	○
		秋田	秋田大学理工学部	○
1915	桐生	群馬大学理工学部	○	
大正期	1920	横浜	横浜国立大学理工学部	移転
		広島	広島大学工学部	移転
		金沢	金沢大学工学部	移転
	1921	神戸	神戸大学工学部	移転
	1922	浜松	静岡大学工学部	移転
		徳島	徳島大学理工学部	○
	1923	福井	福井大学工学部	○
		長岡	新潟大学工学部	移転
1924	山梨	山梨大学工学部	○	
昭和戦中期	1939	室蘭	室蘭工業大学	○
		盛岡	岩手大学理工学部	○
		多賀	茨城大学工学部	○
		宇部	山口大学工学部	○
		新居浜	愛媛大学工学部	移転
		久留米	久留米工業高等専門学校	○
	1943	長野	信州大学工学部	○
	1944	高岡	富山大学工学部	移転
和歌山		和歌山大学システム工学部	移転	
彦根		滋賀県立大学	移転	

## 1. はじめに 福井の戦後復興と卒業生の活躍

これまで8年近く建築史の研究視座から、誰も踏み込んでいない戦後福井の建築都市復興の解明を地道に取り組むなかで、確かな手応えと勇気づけられる秘話に幾度も直面してきた。それは、福井大学工学部の前身である福井高等工業学校を卒業した建築技術者が、空襲と地震で壊滅した郷土復興に向けて、命がけで奮闘する生々しい姿であり、その技術者としての生き方に内面から沸き立つ感動を禁じ得なかった。かかる福井県戦後建築史の研究調査を進めるうちに、母校・福井大学工学部への誇りと愛情がこころの奥底から自ずと溢れ出してきたのである。

このような母校への想いを同窓会で話してほしいと塚田律夫氏から誘われ、2019年6月の北陸支部総会で初めての講演を行った。その後、戦前の学校創設から戦後の新制大学誕生への変遷を建築だけでなく繊維、機械など全ての学科を射程に入れて詳細に調べ出した頃、工業会事務局の絹谷信博氏と谷口秀次氏、上田弘文氏のご尽力から、2023年7月「福の井会」で講演する貴重な機会を得た(次頁の新聞記事参照)。

## 2. 文京キャンパスの歴史的意味とクスノキの老樹

現在の福井大学文京キャンパス内の工学部エリアは、戦前の福井高等工業学校の敷地全体を引き継いだことから、創立以来100年の歴史を有する。左表から福井のように戦前の学校敷地を継承する国立大学工学部は半数程度に過ぎない。しかも東京・大

# 創立100周年 福井大工学部

## 建築科が支えた戦後復興

福井大工学部は今年12月、創立100周年を迎える。長い歴史の中には二つのターニングポイントがあった。一つ目は、前身の福井高等工業学校創立の1923年。初代校長が当初計画になかった建築科設置を文部省に認めさせた。福井空襲で校舎が壊

滅し、学校の風外移転が取りやめられたのが二つ目の岐路。産学官挙げての反対運動で移転を免れた。こうして建築を担う人材養成の場が産声を上げ、存続したことが、福井の戦後復興を支えた。と建築史の研究者は指摘する。

(伊藤直樹)



1927年の福井高等工業学校キャンパス（現福井大文京キャンパス）写真中央よりやや下が正門。建物の講義棟は右側中ほど、左下角には坂部保治が設計した講義が見える。

### 存続の危機越え技術者育成

建築科主任教授だった坂部保治（坂部直樹氏提供）



初代校長の榊盛治



福井高等工業学校の建築科製図室（福井大工業会提供）



福井大大学院工学研究科出身の市川秀和・福井工大教授が先ごろ福井大工学部OB会で講演し、建築の視点で1世紀をひもといた。市川教授によると、二つ目の岐路におけるキーマンは福井高等工業学校初代校長の榊盛治。色紙、初級、機械の3科体制だった文部省案に異を唱え、それまで日本海側になかった建築科設置を強く要

求。予算は増額しない条件付きながら承諾を引き出し、4科体制での開校にこぎつけた。1923年は関東大震災が発生した年。「日本海側で、いつ大災害が起きても不思議ではない。復興建築を担う技術者を育てておくべきだ」と榊校長は考えたのだらう。と市川教授、リーダーシップに秀でた熱血漢で「熱誠人」の異名を持つ榊校長の行動力と先見の明がなせる業だという。

45年には福井空襲で校舎が焼失、二つ目のターニングポイントが訪れる。講義再開がままならない中、舞鶴市が学校誘致に名乗り、新制福井大への移行準備さながらの再建はない校舎が倒壊する。大学移行自体が危ぶまれ、設置構想から建築学科が外される事態にも直面した。憤慨した坂部は日本建築学会長の協力も仰ぎ、存続に奔走。そのかいあって翌49年、工学部に建築学科を有する福井大として開学した。

大学ではその後、坂部や、東京帝大で丹下健三と同期だった五十嵐重理ら福井きつての教授陣が人材を育成。OBは公共事業を取り仕切る県や福井市の技師として、または設計事務所を起業して建築士として、復興需要にこたえた。市川教授は「福井大の先人を中心とした産学官ネットワークなくして戦災復興からの復活はなしえなかった」と話している。

断固反対の旗を上げたのが、本場ドイツ仕込みの技術を学生に教えていた建築科主任教授の坂部保治をはじめとする教職員であり、福井の戦後復興には地場の建築技術者が不可欠と考えた熊谷太三郎福井市長。産業界も巻き込み、国に存続を働きかけた。学生たちも移転反対を大会決議。こうした運動が実り、舞鶴移転話は白紙に戻った。

を上げたのだ。

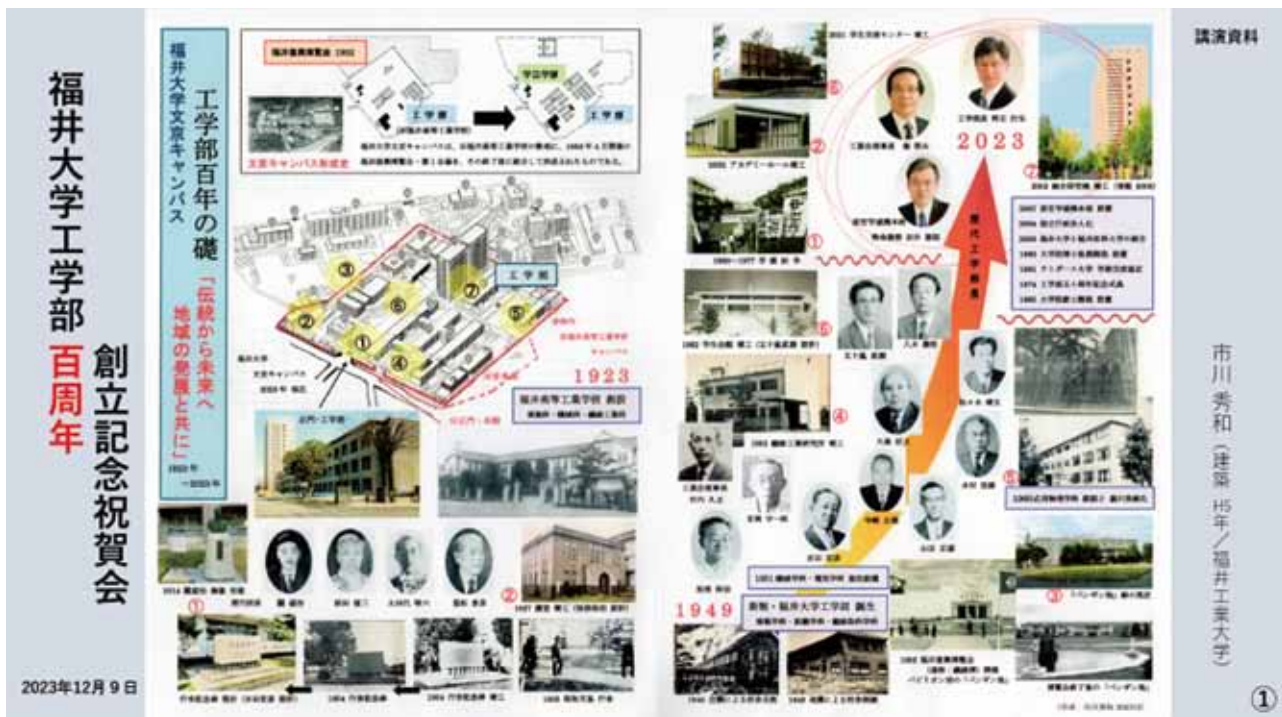
福井大工学部 前身の福井高等工業学校は1923年2月創立、翌24年に開校。44年に福井工業専門学校と改称。49年開の新制福井大工学部に継承された。師範学校の流れをくむ教育学部、現代教育学部、もともと福井の工学部建築学科は現在、建築・都市環境・学科に改編。今年12月に工学部100周年祝賀会。来年7月に記念講演を企画。記念館建設や記念誌作製の計画がある。

福井新聞 (2023年8月23日)

阪・横浜・広島・長岡のような敗戦末期の大空襲による壊滅都市では、戦後の新制大学誕生に当たって「移転」による新たなキャンパス整備が一般的な選択であったことを考え合わせると、福井は極めて稀なケースと言わなければならない。大空襲に加えて3年後の大地震まで被った悲劇的な福井市において、なぜ新制大学の誕生が戦前と同一の敷地で実現できたのか、他大学の事例から比較するとき、その歴史の意味は実に深いと考えなければならないだろう。なお現在の文京キャンパス正門近くに立つクスノキの老樹が、空襲・地震と続く幾多の悲運を力強

く生き抜き、100年にわたるキャンパスの歴史と風景を見守ってきたことは疑いえない。ともかく文京キャンパスの有する歴史の意味と、そこから未来に向けて何を学ぶのかを後述したいと思う。

そこで以下の本文では、福の井会での講演に続いて同年12月9日の創立記念祝賀会で講演した内容に基づき、その概要を報告する。なお補足として工学部ホームページの「工学部創立100周年記念動画」を参照していただければ幸いです。



### 3. 工学部創立100年の歩みと伝統の絆

工学部100年の歴史と伝統を全て詳細に把握することは容易でないものの、その全体像の輪郭を捉えるには、まず福井高等工業学校と福井工業専門学校による戦前を中心とした前半期と、戦後の新制・福井大学工学部誕生から現在までの後半期に大きく二分することが有効であろう。かかる認識の上で100年のイメージを図式化したものが上図であり、左側の上にキャンパス図を掲載し、左側の下が前半期、そして右側に後半期を、それぞれ重要な人物(校長、工学部長)と建物の写真等で取り纏めたものである。ただし全てを網羅出来るはずもなく、残念ながら掲載を断念したものについてはお許し願いたい。創設から100年をかけて日本海側最大規模の工学部組織へと躍進してきた苦難と栄光の歩みを1枚のイメージ図でもって、皆さんと共有したいと願ったことである。

このイメージ図の作成を通して明確に察知したことは、こうした工学部-地域-卒業生を貫く絆の伝統を決して失わずに未来へ繋げる責務であった。工学部の躍進は常に地域の産業文化発展とともにあり、工学部と地域社会が相互に信頼し支え合ってきた100年の結実にはかならない。そして両者を繋ぐ役割を卒業生が多分に献身的に担ってきたからこそであった。

### 4. 関東大震災直後の学校創設と開校をめぐる

1923(大正12)年12月10日付にて福井高等工業学校が創設された歴史的意味を考える時、決して



1923(大正12)年9月1日11時58分に発生した関東大震災による帝都東京の壊滅状況



黒川誠三郎  
(福井精練)

1923(大正12)年12月11日付にて福井高等工業学校・初代校長を拜命した 關盛治(1878~1933)



佐野利器  
(東京帝国大学)



**創立経緯**

設置公布  
1923：大正12年  
12月10日勅命501号

初代校長 關盛治 拜命  
12月11日付

学生定員 120名  
建築科A 40名  
機械科M 40名  
繊維工業科  
色染分科D 15名  
紡織分科T 25名

3年制（1年3学期制）  
第1期生入学式 95名  
1924年4月10日  
D A35, M30, D10, T20

**創立期の教員たち**

建築科長 坂部保治＊  
教員 吉田宏彦＊ 野々目一二  
角田重喜千 高橋寛

機械科長 金尾忠義  
教員 堀内利正 清水篤彦  
吉野源之助  
機械工場長 中山邦寛

繊維工業科長・紡織分科長 吉田喜一  
教員 佐々木三夫 大森留郎  
新井幸長  
紡織工場長 田中次郎

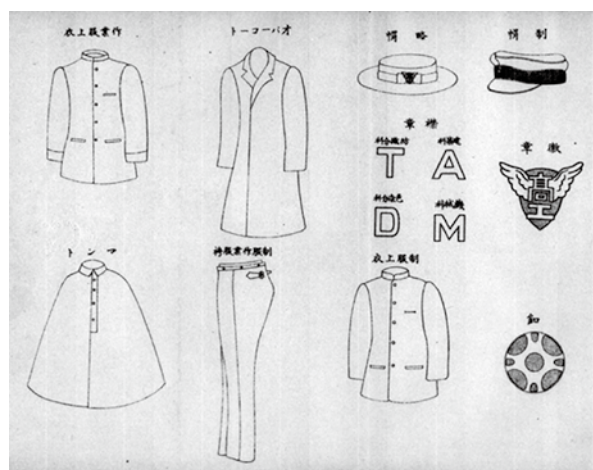
色染分科長 立木勝蔵  
教員 宮岡宇一郎＊ 岡田晃  
色染工場長 菊川俊助

＊即戦後の福井大学工学部へ



見落とせない重大事が、その3ヶ月前の関東大震災である。つまり関東大震災によって壊滅した帝都東京において被災した文部省は、焼け残った大手町の台湾銀行に避難し、その屋上の仮設事務所内で福井高等工業学校の創設準備が、初代校長拜命予定の關盛治を中心に進められていた。この時45歳の關は、ヨーロッパ留学の経験から最先端の繊維産業に精通した上に、米沢・桐生・京都の勤務経験から国内事情にも詳しく、福井の新興繊維業の発展を目的として新設される高等工業学校・校長に最適の人物として抜擢された。ただし關自身は、主治医から余命2年の宣告を受けていたことを胸中に固く秘して、大震災の惨状のただ中で誕生する学校の運命に、命をかけた生涯最期の仕事と覚悟して立ち向かったであろうことは想像に難くない。

その關が真っ先に取った行動は、まず福井の実情を把握しようと、イギリス留学時代に知り合った福井精練の黒川誠三郎への相談であった。後年の黒川が当時を回想した文章から確認できる。さらに文部省が設置予定とした繊維と機械の2学科編成に対して關は、関東大震災の惨状を踏まえ、日本海側で初となる建築科の増設を強く要望したのであった。これには、關の親友で建築耐震構造を専門とした佐野利器（東京帝国大学教授）の助言があった。かかる關の要望に対し、壊滅した帝都復興に直面する文部省は甚だ困惑したようで、増設予算が見込めない事を条件に建築科設置がようやく認められた。こうして建築科・機械科・繊維工業科（紡織分科・色染分科）の3学科による学校設立が最終的に決定し、翌年4



生徒の制服・制帽・帽章など  
詰襟に学科バッジを付けた

A：建築 M：機械  
T：紡織 D：色染



月開校に向けた教員採用や学生募集、校舎建設等の準備が急ピッチで進んだのである。

福井高等工業学校は、1924（大正13）年4月10日に入学式を挙行し、全国から95名の第1期生を迎え入れて3ヵ年の学校生活が始まった。定員120名を大幅に上回る応募者があったものの、合格基準を厳しくした結果である。また雪国の福井に優秀な教員が集ったのは、關校長の人脈とその人間性に拠るものであろう。その後の学校運営で中心となった教員は、關の愛弟子・吉田喜一と若手の坂部保治、宮岡宇一郎らであった。特に坂部と宮岡は、戦後の新制大学誕生への移行においても活躍した最古参の教授となった。

## 初代校長 關 盛治のことば



遺著『工業教育一家言』1934

### 熱誠人の教育信念

学生は単に機械的に注入せられたる知識の容器であってはならぬ。教育は注ぎこむべきものでなく感化啓発を以てその終局の目的とせねばならぬと云うのが私の理想である。それ故に教える者は教えられる者に対し**親愛の情を熱誠の力に寄せて**進まねばならぬ所に教育の真諦もまた妙味もあると私は考えている。

### 意気地なし

何々学校の出身である事にコダわるのは、出身学校という保護色にかくれた了見である。境遇、環境の捕虜となるもの多し、人呼んでイクヂナシという。

### 努力の小出し

私は努力の小出しが大嫌いだ。努力の小出しは努力の浪費だ。われわれは常に何事に対しても自己の持つ全幅の努力を拂い出さねばならぬ。

自己の最善を尽くす事、さすれば自分で測り知る事の出来ない力が湧いて来る事は私の体験であります。

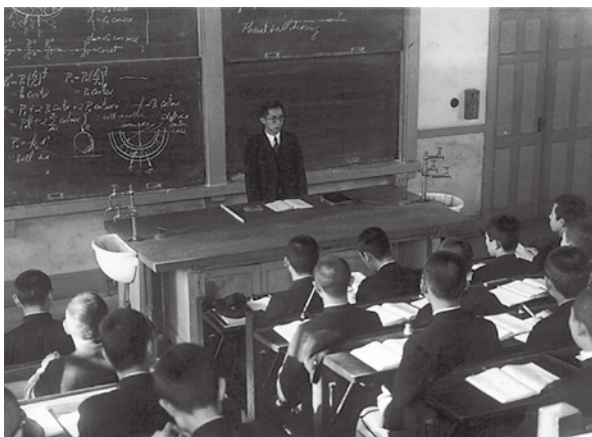
### 金魚と鯉

先日、一青年を戒めたことがある。君は金魚の様なものだ。清い水の中で焼酎を与えておけばどうにか元気だが、一度これを急流に投ずれば忽ちヘタになってしまう。濁流急湍を物ともせず、瀬をも乗り切る鯉の如き澁澁たる体力と元気がなければならぬ。

### ドン底から

困苦欠乏に遇わざる人は不幸なり、と諺にある様に、人間は一度この難関を通らぬと本当の天賦の力が頭を擡げて来ないものだ。

⑦



機械科の授業風景(本館2階 階段大教室)



生徒控所には、食堂と売店があり、学科を越えた生徒たちの交流の場であった

## 5. 初代校長・關盛治の教育愛：熱誠人のことば

關盛治とは、どのような人物だったのか。雪深い信州松本にて貧しい下級武士の家に生まれた關は、幼年時から奉公に出たものの、周囲の温かい援助があって東京帝国大学へ進学して機械工学を学んだ。卒業後、発明家・豊田佐吉との運命的な出会いから、自動織機の開発に貢献し、そしてヨーロッパの最新繊維産業を学ぶために留学した。しかし異国の地で人間が誠実に生きる上で大切な信仰に辿り着き、洗礼を受けた。こうして關は、人情溢れる高貴な人格と強靱な意志をもつ内剛外柔の技術者として成長し、「熱誠人」と周囲から呼ばれるようになったという。

關の教育信念については、没後に遺された原稿等が編集された新書版『工業教育一家言』から知ることができる。ここから熱誠人のことばを紹介すると、「学生は単に機械的に注入せられたる知識の容器であってはならぬ」として詰め込み教育を痛烈に批判し、学生の主体性を信じて「教える者は教えられる者に対し親愛の情を熱誠の力に寄せて進まねばならぬ」と吐露しており、この遺著には今なお味読するに足る内容が詰まっているのである。

こうした關の教育信念に教員たちも深く共感して、学科を超えた教員ネットワークが生まれた。その中で学生たちは關ら教員を敬愛し、一つの家族のような強い絆を育みながら、高貴な人格と強い身体、そして実践的な専門技術を厳しくも温かい指導を受けて一人一人が主体的に成長していった。關の健康状態から校長を辞するにあたり、学生から延期願いが出たのは故無き事ではない。

## 校友会から同窓会の設立へ 1938

■「同窓会」設立までの経緯（母校創立15年後）  
 第1期生の卒業は、1927（昭和2）年3月である。在学生と教職員、卒業生をつなぐ機関誌として校友会誌「北冥」があり、年1回発行された。

その後、卒業生が増えるにともない「同窓会」設立の声が出たものの、初代校長・關盛治は反対の立場を貫いた。關が熱く語る「植木鉢の松よりも、深山の松となれ」との願いから、学校の歴史は未だ浅く馴れ合いの集団をつくるよりも、実社会で独り生き抜く人間力と専門力の向上を優先すべきという厳しい姿勢であったという。この關の意志を2代校長・前田復三も受け継いだことから、創立10年を迎えても同窓会は実現しなかった。

ところが1933年の關の逝去に続く1937年に前田が急逝し、その葬儀にあたって卒業生への連絡が取れないことに困惑した一期生たちが、3代校長の太田代唯六に懇願して快諾され、漸く「福井高工同窓会」が1938（昭和13）年3月に設立した。その発起人となった「卒業生7名」から初代会長の伊藤義朗、のちの2代会長に竹内久正が選出された。

翌年12月に「同窓会會員名簿」が初めて発刊された。



2代校長 前田復三



初代会長 伊藤義朗  
(1938～1940)



2代 竹内久正  
(1940～1966)

同窓会発起人メンバー7名  
 竹内 隆 (A2)  
 伊藤 義朗 (M2) 山田治之助 (M3)  
 竹内 久正 (D2) 武田文之助 (D2)  
 池田 秀二 (T3) 中島 与作 (T5)



3代校長 太田代唯六



校友会誌「北冥」  
第6号 1928



「同窓会會員名簿」  
1939

⑧

### 6. 同窓会の設立経緯：卒業生と母校の連携

第1期生の卒業式は1927（昭和2）年3月10日に行われ、61名（A22・M16・T16・D7）のみ実社会に巣立つことが許された。5年後の卒業生は450名を超え、全国各地から「同窓会」設立の声が度々出て来たものの、初代校長・關盛治は反対の立場を最後まで貫いた。關が父親のように語る「植木鉢の松よりも、深山の松であって欲しい」との願いから、学校の歴史はまだ浅く馴れ合いの集団をつくるよりも、実社会で独り生き抜く人間力と専門力の向上を優先すべきという厳しい姿勢であったと伝えられている。この關の意志を2代校長の前田復三も受け継ぎ、創立10周年を迎えても同窓会の設立は実現しなかったわけである。

ところが1933年の關の逝去に続き1937年に前田が急逝し、その葬儀にあたって全国各地の卒業生に連絡が取れないことに困惑した第1期生7名らが、3代校長の太田代唯六に懇願したところ即時に快諾され、漸く「福井高工同窓会」が1938（昭和13）年3月6日に設立された。この時の卒業生は約1,200名にもなり、発起人の中から初代理事長の伊藤義朗が選出された。翌年12月に文庫本サイズの『同窓会會員名簿』が初めて発刊され、学科を超えた卒業生の繋がりと母校との連携協力が徐々に強化され、同窓会の組織づくりが着実に進んだ。アジア太平洋戦争の拡大から卒業生も続々と戦地へ送られていく当時、同窓会は卒業生と母校を繋ぐ大切な心強い「絆」であったに違いない。戦中から終戦に至る過酷な状況下で、この大切な絆を守り抜いたのは、2代理事長の竹内久正であった。



3代 黒川誠一



4代 川上英男



5代 堀照夫

戦後、竹内らの同窓会役員は、卒業生の生存確認を実施して名簿作成に着手した。さらに新制大学発足直後に改称して「工業会」となり、戦後福井の復興のために母校と地域を繋ぐため、「福井復興博」終了後の1953年に産官学連携の原点となる「繊維工業研究所」設置に多大な経済支援などを積極的に行った。

1966年から3代理事長・黒川誠一のもとで全国の支部組織が体制強化され、母校との多様な連携も活発化した。特に1974年の工学部創立50周年記念として『福井大学工学部五十年史』発刊と、正門横に植樹された美しい樹形のケヤキは、創立時を偲ぶクスノキとともにキャンパスの固有な風景を創り出している。

21世紀を迎えて4代理事長に就いた川上英男は、大学創立50周年記念事業の「アカデミーホール」建設、そして2014年の工学部創立90周年記念事業として「初代校長・關盛治胸像」再建を成し遂げた。

5代理事長・堀照夫のもとで、2018年の「大学同窓経営者の会」発足など数多い事業を支援し、2023年12月9日には「工学部創立百周年」記念祝賀会が挙行され、2024年7月20日に記念式典が予定されている。そして工業会は、新たな一歩を踏み出すことになる。

## 空襲によるキャンパス全焼と終戦後の移転問題 1945

空襲で焼失した福井駅前 1945年7月



空襲で炎上する市内中心部

空襲で炎上する建築教室棟

校長 重松倉彦

筆頭教授 坂部 保治

熊谷 太郎 市長 ⑩



戦時中は「軍事教練・軍需工場実習」が実施された



建築科・吉田宏彦教授が1938年に設計した「福井市忠霊場」が足羽山内に現存する

教練・軍需工場実習」等が実施された。軍需工場は県内だけでなく岐阜等の県外にも及び、学生は工場内で宿泊して厳しい作業に従事させられながらも、教員が定期的に訪問して特別授業を行って励ましたと伝えられている。なお学徒動員は無かったものの、多くの卒業生が召集されて戦場へ送り込まれ、戦死の悲報が学校へ続々と届く異常事態となった。卒業生の戦死者の実態は未だ不明であり、200名以上になると思われる。

こうした戦時中に福井市内の遺族たちが戦死者を弔う場所を求めた依頼に応じて、建築科教授の吉田宏彦が1938年に「福井市忠霊場」を設計した。

さらに敗戦末期の1945年7月には、福井市中心部が空襲によって炎上し、学校の校舎も全て焼失してしまう大惨事となった。ようやく終戦を迎えても学校は再開できず、学生と教職員は散り散りとなってしまう、途方に暮れる重松校長と坂部教授らの下へ、舞鶴市より海軍の空き兵舎への移転受け入れの要望があった。これに対して坂部が移転はありえないと大激怒して、校長と共に連絡が付く学生と教職員を集めて緊急集会を開き、参加者全員一致の「移転反対・現状維持」を決議して地元新聞に発表した。この学校の決断に応じた熊谷太郎・福井市長は、緊急市議会を開催した上で移転に対し「断乎反対」を発表した。実は終戦直後から坂部教授と熊谷市長は、学校の再建と市の復興に向けた相互協力の必要性を話し合っていたのである。

### 7. 卒業生の戦死・校舎焼失、戦後の移転問題

昭和12年の上海・支那事変に始めるアジア太平洋戦争が激化していく時勢において、授業に「軍事

**新制福井大学工学部 発足 1949**

福井新聞  
新制大学百八十五校が誕生  
今年四月に開校決定

福井大学の現状と将来  
お粗末な校舎設備  
教授陣の充実もこれから

工学部 1949  
3学科 建築学科  
紡織学科  
繊維染科学科  
(共通科目: 機械、電気)

工学部 1951  
5学科 建築学科  
機械学科  
電気学科  
紡織学科  
繊維染科学科

工学部  
建築  
機械  
電気  
繊維染料  
紡織

工学部長 重松 健二  
坂部 保彦  
繊維 宮岡 宇一郎

工学部キャンパス 1951



1945年7月の空襲による全校舎焼失後、戦後復興で再建した校舎が、3年後の1948年6月の地震で倒壊し、翌年の新制大学発足が危ぶまれた

### 8. 地震による校舎倒壊から 新制大学の誕生へ

終戦直後の舞鶴移転問題を克服した重松校長と坂部教授らは、校舎再建と授業再開を最優先に取り組

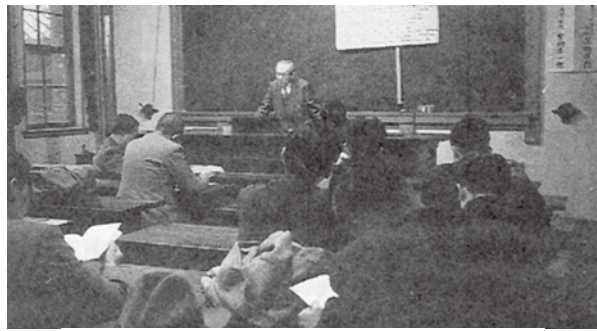
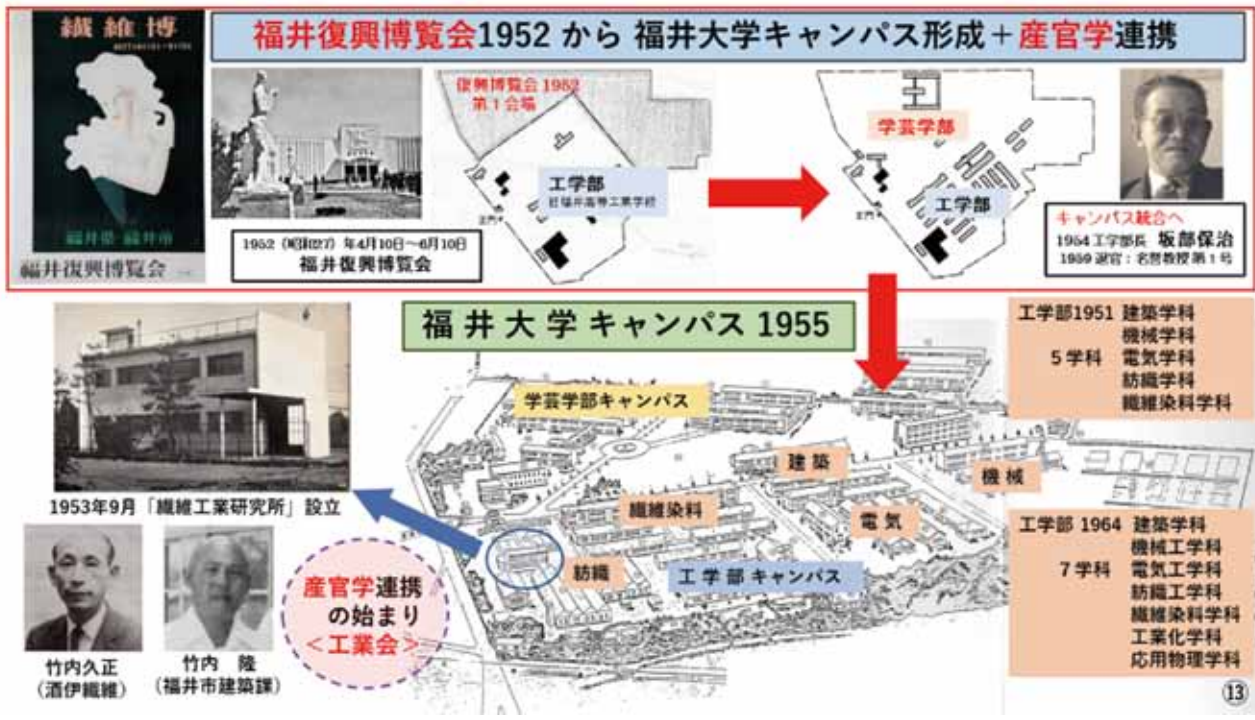
むために、熊谷市長と連携して数多くの復興事業とともに進めた。この時、学校と福井市の間で活躍してくれたのが卒業生の技術者(建築・繊維・機械など)であったことを決して忘れてならないだろう。

こうして校舎の再建と市の復興事業が両輪のように動き出した頃の1948年6月に大地震が発生し、福井市中心部は再び壊滅状態となった。空襲時の2倍以上の死者数であり、再建された校舎も全て倒壊した。

この2度目の危機に坂部はかなり困惑したようで、学校存続が無理であれば金沢の工業学校に受け入れてもらえないかと連絡したところ、快諾の返事があったという。ところが熊谷市長から再び協力関係の相談があり、坂部は学校存続を決意した。そのうえ満州から帰郷して若手教員となった五十嵐直雄は、東京へ出て建築家として活動する計画であったが、坂部の熱心な協力依頼から福井に残る決心が出来たという。

しかし前途多難であった。文部省からは師範学校等と統合して翌1949年に誕生する新制国立大学工学部の体制づくりが課せられたのである。そこで重松校長が初代工学部長となり、創立以来の最古参の坂部教授と宮岡教授が中心となって建築学科・紡織学科・繊維染科学科の3学科体制でもって1949年5月に正式発足した。なお機械と電気の教員は共通科目を担当し、2年後の学科増設に向けて着実に準備したのである。





宮岡宇一郎教授の博士論文公聴会  
 題目「ジシアンジアミドを用いる繊維処理剤の研究」  
 1956 (昭和 31) 年 11 月 29 日：京都大学



故宮岡宇一郎教授 工学部葬儀  
 1958 (昭和 33) 年 2 月 9 日：福井大学

### 9. キャンパスの形成と一教授の壮絶な死

福井大学工学部の発足時は、建築・紡織・繊維の3学科から始まったものの、2年後の1951年には機械・電気が復活して戦前の高等工業学校と同等規

模の学科構成に至った。また福井市内の復興事業も着実に進んだことから、1952年4月から「福井復興博覧会 (通称：繊維博)」が工学部キャンパスに隣接して開催された。終了後の博覧会敷地は福井大学へ無償譲渡されるとともに、鯖江から学芸学部を同敷地へ移転させて、2代工学部長となった坂部の下で、現在の文京キャンパスの基礎が形づくられたわけである。

さらに工学部では、復興博覧会で協働した大学と地元繊維業界との関係を発展させるため、翌1953年に「繊維工業研究所」をキャンパス内に新設したのである。これには工業会理事長・竹内久正を中心とした卒業生の多大な支援があったからこそであり、現在の福井大学産学官連携本部の源流と位置付けられる。

このように工学部の誕生から学科の増設、研究所の新設など躍進する反面、その将来に命を捧げた一教授の死を忘れてはならない。大学発足時に、教員の教授資格として業績や博士号が審査され、特に高等工業学校以来の教員には厳重に求められた。そこで最古参の宮岡宇一郎教授が率先して博士論文の執筆に挑み、日々の過酷な実験から体調を悪化させながら纏め上げ、京都大学での博士論文公聴会を終えた2ヶ月後、59歳で壮絶な死を迎えた。宮岡の愛弟子・清水融は、師へのレクイエムに研究継承の決意を込めた。そして宮岡・清水の精神は、いま堀照夫に受け継がれている。

1970前後 大学紛争 から 1980年代 大学の国際化へ：五十嵐直雄 学長 1977～83



大学紛争の激化：正門バリケード

1969年 工学部学生ストライキ  
 1970年 正門バリケード  
 1972年 正門バリケードを機動隊が実力排除  
 1974年 工学部学生ストライキ（→工学部長五十嵐直雄）  
 学生暴力による教員傷害事件  
 1977年 卒業式・入学式を中止する（3～4月）  
 1977年5月18日 第6代学長 五十嵐直雄（～1983：2期）  
 ＊文部省から元文部大臣・永井道雄が擁立されたのに対し、  
 大学自治は外部に頼らず、選入学長として全学・選民が支持。  
 1980年 3月 日下部・グリフィス学術交流基金設立  
 1981年10月 ラトガース大学との学術交流協定



ラトガース大学との協定：五十嵐学長



五十嵐直雄のことば（学長式辞「入学生諸君へ」1983.4）

さて、私はこの5月で学長の任期を終えます。いろいろなことがありましたが、その感想を一言で申すなら「福井大学はよいところであった」ということであります。これは比較の問題ではなく、「絶対によい」ということであり、その絶対とは「学校に対する限りなき愛」と言った方が正しいかもしれません。始めからそうではありませんでした。最後にきてそのような感想を持てたのは幸せであったと思います。

58年度入学の諸君も4年後には私と同じように**母校に対する限りなき愛**を感じて卒業されるよう努力されんことを期待して、私の式辞といたします。

17

10. 五十嵐学長が遺したものの：母校への限りなき愛

その後、福井大学工学部は1964年に7学科体制まで進展して、日本海側での最大規模の工学研究教育組織へと躍進を続けた。さらに1965年に念願の大学院工学研究科修士課程（6専攻）を設置するに至った。こうした背景に国内では戦後復興を成し遂げ、高度成長期へ突き進み、1960年の東京計画から1964年の東海メカロポリス計画と東京オリンピック開催など、豊かさと好景気に上昇する時代動向があった。

なお、こうした時代の変遷に「光」と「影」があるとすれば、1960年の安保闘争から全国で徐々に過激化する多様な幅広い社会運動にも注視する必要がある。そして60年末には大学紛争が全国で広がり、1970年前後には福井大学にも及び、各地の過激な集団が入り混じったこともあって、福井大学の紛争は長期化して全国メディアで取り上げられる事態に大きく展開し、ついに機動隊の出動までに至った。

こうした福井大学の紛争状況に対して文部省は、次の学長選に元文部大臣・永井道雄を強く推薦してきたが、これに対して当時の福井大学は、大学自治は自ら護るとして断固拒絶して、工学部長で建築学科教授の五十嵐直雄を次の学長として擁立した。さらに県民からも応援する活動が広がり、五十嵐への期待と信頼がいっそう高まった。こうして1977年に6代目の県人学長となった五十嵐は、真っ先に大学紛争に関わる学生たちと愛情をもって真摯に向き合い、学生の将来のために熱い想いを尽くしたことで、ようやく落ち着いたキャンパス風景を取り戻した。



五十嵐直雄スケッチ「ラトガース大学」1980年

さらに五十嵐は、福井大学の海外へのグローバル化を視野に入れて日下部・グリフィス学術交流基金を設立し、アメリカ・ラトガース大学との学術交流協定を締結し、現在につながる国際的礎を築いた。

そして五十嵐直雄は、学内外からの期待に応え続けた2期6年となる学長職を勤め上げた。その1983年5月の退任を前に、4月の入学式で新入生に向けた学長の最後のことばとして「母校に対する限りなき愛」を4年後の卒業時には感じてほしいと心からのエールを贈ったのである。五十嵐が遺したことばは、福井大学で学び育った卒業生一人一人に、いつまでも語りかけてくる温かい思いやりに満ちたものであり、そこには勇気と誇りにつながる強い意志が託されている。

工学部創立100周年を迎え、關盛治から五十嵐直雄に流れる「母校愛」を今のわれわれは受け継ぎたい。